品質工学会の魅力

・・視　点

1993年品質工学フォーラム設立，1998年7月品質工学会への改称を経て品質工学会員数は右肩上がりで増え続けたが，2007年に減少に転じた。この年は団塊の世代一斉退職の2007年問題，翌年のリーマンショックのほか，田口玄一が病に倒れた次の年でもある。2016年9月一般社団法人品質工学会設立の後も今に至るまで会員数の減少が止まらない。

定年など会社を離れるタイミングで品質工学会を退会する方がいる一方，「品質工学会から得るものが無くなった」という理由で退会する方もいる。会員の減少を止め，さらには増やすために，品質工学会が会員に提供する価値を考える必要がある。

会員を増やすためには会員以外の目に止まる品質工学会の魅力を発信する必要があるが，その前に現会員に感じていただく品質工学会の魅力について議論してみたい。いずれ会員みなさんのご意見をいただくとして，今回はまず編集委員が考える「品質工学会の魅力」について以下に議論する。

—品質工学会に限らず，他の学会でも，20年前は1万人程であった会員数が，現在では1/3程度に減少していて，多くの学会が，会員の増強どころか維持に危機感を持っている。
—品質工学会員の感じる「品質工学会の魅力」はたくさんあるはずだから，具体的に議論したい。
—品質工学会員数が増えていた時代は日本経済が元気で，品質工学会に限らず学会活動が盛んだったこと以外に，どんな魅力があったのだろうか。
—田口玄一の魅力が大きかったと思う。
—「それまで解けなかった問題が，田口玄一によって魔法のように解かれていくのを見て品質工学に惹かれた」といった人がいる。
—大げさではあるが，「奇跡を起こす」といった年輩の会員もいた。超能力か魔術のようなものを見せられて一気に引き寄せられた。
—半導体の歩留まりを33％から87％に改善したベル研究所の事例が有名だが，不可能と思われた問題を実験18回で鮮やかに解決したことが大きい。
—田口玄一という魔術師を失った今，品質工学会が魅力を失うのは避けられないのだろうか。
—魅力という点で，品質工学には属人的な面があることは避けられない。
—ある会長クラスの人が以前「一代限りだ」ということをいった。新規やオリジナルの品質工学を発信できるのは田口一代限りという意味だったと思う。
—そのような学術分野は他にもあるし，それが一代で終わらず継続している例もある。
—田口個人にすがり属人化するのではなく，品質工学として継続させるためには，そもそも品質工学を定義する必要がある。
—田口は「社会の自由の総和の拡大」を品質工学の目的とした。
—矢野宏は「品質工学は計測技術」といっていた。
—自由の総和の拡大という目的に対して，「社会損失の最小化」は手段と考えられる。また，測れないものは改善できないから，損失を低減するためには損失を計測する必要がある。つまり，計測は目的ではなくて手段である。
—自由の総和の拡大も，損失の最小化も，良いことである。むだが無くなれば儲かるのだから，誰でも魅力を感じなければおかしい。
—まず，むだを無くして社会損失を低減する必要性をどれだけ感じているかという問題がある。
—危機意識の問題であるが，今はSDGsと言われるようにむだを無くす機運が高まっており，時代を先